山口・長門国分寺跡

1 所在地　山口県下関市大字豊浦村字亀の甲一八二九―二
2 調査期間　一九八〇年（昭55）四月～一〇月
3 発掘機関　下関市教育委員会
4 調査担当者　甲元真之・山内紀嗣・水島稔夫・村田多津江・伊東照雄
5 遺跡の種類　寺院跡
6 遺跡の年代　奈良時代～江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

古代の地方官衙の一つに数えられる長門国府や国府周辺に所在した遺跡の研究は、すでに江戸時代からの記録が残されている。しかしながら国府の正確な位置や規模については、具体的な解明もされておらず推測の域をでない。わずかに長門鋳銭司跡や長門国分寺跡の位置が確認される

（小倉）

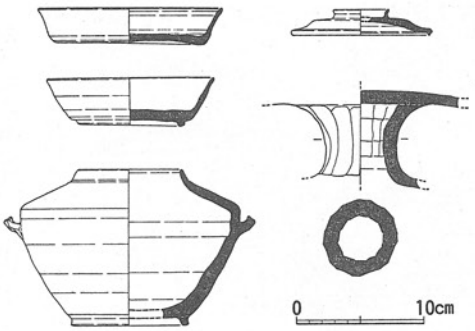
だけで、国分尼寺の存在すら不明である。

市街化の進渉するなかで、長門国府や国府周辺に置かれた施設の位置や規模を解明することを目的として、下関市教育委員会では一九七七年度から調査指導委員会を設け、連年発掘調査を実施した。

長門国分寺跡の発掘調査は、一九七七年（昭52）に寺域の東限を確認した。一九七九年（昭54）に実施した寺跡の推定南縁からほぼ中央の位置で、創建時の基壇の一部かと推定される遺構を検出した。この調査結果から、検出した遺構の範囲、遺構の築成手法を確認するため、一九八〇年（昭55）は、調査地北半部に重点を置くと同時に南端に想定される中門、回廊の確認を行うこととした。

調査は、前年度の試掘坑のほか北半部のほぼ全域に新設した試掘坑とともに、一九七九年に検出した遺構面まで掘りさげ、基壇の範囲を確認するために、試掘坑内の東西・南北に巾一mの小試掘坑を設け、地山面まで掘りさげ、基壇築成の手法を確かめた。

調査の結果、北半部では基壇が築成される以前、すでに掘鑿された小溝（LD一〇一）、東西六・七m巾の性格不明の溝状遺構（LX一〇一）が南北方向に延びており、この二遺構からは八世紀中葉から後半に位置づけられる須恵器の杯蓋・壺・杯・皿・高杯が出土した。基壇は、この二遺構が掘りこまれた地山面を削平、または部分的に堆積を行うなど寺地を整地したのちに、版築手法による築成がなされていた。その範囲は東西二〇m、南北一八mを超える規模で



ＬＸ101（Ⅺ2層）出土須恵器実測図

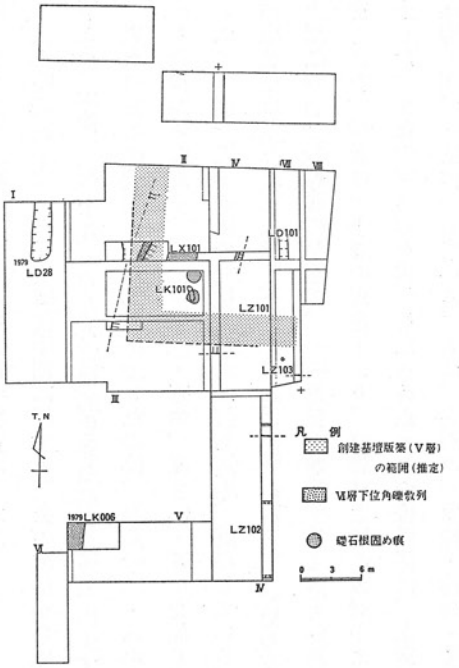
ある。

基壇面には、創建から一八世紀末に至る間に、数次の改築が行なわれた証拠が残され、創建前の遺構を含めて0からⅦの八期に分けることができる。

特に江戸時代初頭から後期に行われた大改築で、使用されたとみられる約二五〇点の土師器杯が、創建時基壇の北側を掘りこみ東西方向に延びる溝（ＬＤ一〇五）に一括投棄されており、そのほとんどに墨書が施されていた。判読できる一五五点には、長門国分寺にかかわりのあったとみられる人名が読みとられる。

木簡は、基壇下のほぼ中央を南北に延びる性格不明の溝状遺構（ＬＸ一〇一）のⅪ2層から出土した。この遺構は、さらに同寺の南端にまで延びていることが予測される。木簡とは離れているが、同堆積から共伴した須恵器は、奈良時代中葉から後半に位置づけられるもので、基壇が築成された時期は、少くとも奈良時代後半と考えられる。

8　木簡の釈文・内容



長門国分寺遺構配置図　古代（0～Ⅲ期）

木簡は二点発見された。

(1)　一端は欠失しており、他の一端を両側から削り出しているが、その先端は欠失している。墨書は認められるものの、判読は未了。

(2)　削りとられた木簡の一部であろうか。墨書は認められるが、断片であるため判読は未了である。

9　関係文献

下関市教育委員会　『長門国府』（長門国府周辺遺跡発掘調査報告Ⅳ）　一九八〇年

（伊東照雄）